

17才の別れ

<http://size.com>

監督・製作 齊木貴郎 撮影 岩神拓郎 音楽 石田倫依 語り部 宮城已知子
出演 嘉数ゆい 南部安耶 沖縄県立豊見城高等学校生徒 字幕校正 齊木更沙
制作協力 成井俊美 Ken Hanada 撮影機材 小輝日文

語り編集 石川孝子 ポストプロダクション ビジョンユニバース イクシード
効果音 740 Sound Design & Mix 「旅の夜風」「海ゆかば」日本コロムビア

何も知らされなかった

1944年10月10日沖縄はアメリカ軍の空爆に曝された。この時、宮城已知子は沖縄県立首里高等女学校の生徒で、通学のため軽便鉄道に乗っていた。飛行機の爆音に気づき汽車の窓から空を見上げると、たくさんの飛行機が視界に入った。だがその編隊は日本軍のものだと思っていた。激しい機銃掃射を受けたが、さとうきび畑に身を隠し、田んぼの脇で死んだ振りをして、なんとか夕方には家に辿り着くことができた。1941年12月8日ハワイ真珠湾を攻撃。勢いにのった日本軍は、東南アジアから中部太平洋の島々を広範囲に占領していった。しかし、それも1942年6月5日のミッドウェー海戦でアメリカ軍に惨敗してからは、敗退の一途を辿った。アジアを経由する補給路を断たれ、日本軍は窮地に立たされていたが、一般国民には日々日本軍の「連戦連勝」が報じられていた。皇民化教育の徹底で、已知子たち女学生も、いざとなったら天皇陛下のために死ぬことが一番いいことだと信じて疑わなかった。二ヶ月程の看護指導を受けた已知子たち瑞泉看護隊は、1945年3月5日首里のナゲーラ壕で卒業式を迎えた。校歌の代わりに軍歌「海ゆかば」を歌うも、連合軍の艦砲射撃に遭い、卒業式は中断された。



節ちゃんだけは忘れられない

已知子は米須本部壕の入口で、擬装の隙間から敵の空襲する状況を見ていた。節ちゃんは已知子のすぐ後ろの岩陰で日向ぼっこをしていた。一瞬耳が聞こえなくなった。振り返ると節ちゃんの肩に爆弾の破片が突き刺さって血が噴き出していた。壕の中の友だちに助けを求めようとするが、「節ちゃんよ、節ちゃん、..」と、言葉が続かない。その晩、節ちゃんは出血多量で亡くなった。他の友だちは、どこでどんな死に方をしたのかわからないが、節ちゃんだけはその死を見ることができたので、いつまでも「節ちゃんだけは忘れられない」。



44年間誰にも話せなかった

「あんたよ、戦争が終わって何年経ってると思ってるんだ？」已知子を取材した新聞記者に、そう言われる迄注射器のことは、誰にも話すことができなかった。それはアメリカ軍に追いやられる中、識名壕から南部へ撤退する時だった。已知子たち看護隊は、軍医から「これを壕の中にいる者全員に打ってこい」と言われ、注射器を渡された。闇の中で何の注射だかわからなかったが、いやな予感がした。友だちが壕の奥へと入って行き、さっさと注射を打って戻って来る中、已知子は壕の入口近くの重傷患者を前にもじもじしていた。



するとその重傷患者が「何の注射だかわかる。金武村には二人の娘と妻が私の帰りを待っている。だから看護婦さん、私がここで亡くなったことを伝えてくれ」。已知子は即座に「兵隊さん、それはできません。私たちはこれから南部へ行きます。どこでどうなっているかわかりません。だから約束はできません」と答えた。注射はしないまま、注射を打った振りをして、みんなのところへ戻った。注射器は草むらの闇に投げた。後でその注射は青酸カリだったと知り、「あー、打たないでよかった」と一人胸を撫で下ろすのだった。敗戦後も、そのことだけは、誰にも言えなかった。言えば警察に捕まると思っていた。新聞記者に笑われた時には既に44年経っていた。



SIZE 製作 配給 株式会社サイズ 〒153-0042 東京都目黒区青葉台一丁目6-4
03-5728-8283 tokyo@size.com

日時:平成27年8月8日(土) 開場:午後4時30分 開演:午後5時
場所:嘉手納町ロータリープラザ2階 大ホール

入場無料